

幼児にとっての被援助と不快感情

(中間報告)

東京学芸大学大学院 泉 井 みずき

本調査では、幼児がどのような場面を「助けた」「助けられた」と感じているのか、さらにはどのような気持ちで援助を受け取っているのかを調査した。その結果、幼児は特に母親と先生に助けてもらっていると感じており、その内容は「何かをしてもらおう」「大丈夫？と声をかけてもらおう」など様々であった。また、ほとんどの幼児が「うれしい」という肯定的な気持ちのみで援助を受け取っており、否定的な気持ちは抱かないと答え、大人とは異なる幼児特有の援助の受け取り方が示唆された。また、調査者が被援助による自尊心の脅威、衡平性の崩壊、心理的負債による不快感情を説明し、その有無を訊ねたところ、3分の2の幼児がそのような気持ちを感じたことはないと答えた。

【キーワード】 被援助 幼児 心理的負債

本研究では、幼児の援助の受け取り方に焦点を当てる。これまでの研究から、大人であれば援助を受けること（以下被援助）には「うれしい」などの快感情と同時に様々な不快感情が生じることが明らかになっている。それは例えば自尊心の脅威 (threat to self-esteem) や、援助者と被援助者の衡平性の崩壊 (inequity)、援助者への借りに対する負担感である心理的負債 (indebtedness) などから生じるものである (西川, 1998)。この不快感情は受ける援助が重大であると感じることでより強くなる感情である。不快感情を減らすための最も一般的、かつ容易な手段は援助者に返報を行うことである。そのため、これらの不快感情は被援助者から援助者への返報を促すという意味では、人間が社会の中で生活を送る上では欠かすことができない感情である。心理的負債により生じる不快感情は、助けてくれた人を傷つけてはいけないという互惠規範 (Gouldner, 1960) が前提となっている (Greenberg, 1980)。人が集団に所属しながら生きていく上で、この互惠規範はとても大切なものであり、幼児であっても援助を受けたことに対して返報を行うことは重要であると考えていることが明らかになっている (泉井 2006)。

それでは、互惠規範さえ備わっていれば、必然的に幼児であっても被援助に心理的負債を抱き、不快感情を感じるのだろうか。幼児は日常生活を送る上で多くの援助を必要としている。しかし、彼らは返報の能力を十分に持つてはいない。幼児が被援助時に不快感情を抱くのであれば、彼らはそれを低減することもままならず、ストレスが蓄積される一方になっているのではないだろうか。しかし、実際の子どもたちを見ていると、そのようなストレスを抱えているようには見受けられない。幼児は被援助に心理的負債を抱かないことから不快感情自体を感じないのではないのか。

このように考えると、心理的負債による不快感情のみならず全ての被援助による不快感情は発達を通して、自分自身でできることが増えることで援助を受ける機会が少くなり、さらには被援助への返報能力も十分に備わった後に生じてくる感情なのではないだろうか。本研究では第1に幼児の被援助

による多様な不快感情に焦点をあて、その有無を確認する。さらに第 2 に、不快感情の中でも心理的負債に着目し、その発達の時期を明らかにすることを目的とする。

事前調査の問題と目的

これまでの被援助の研究の多くは大人を対象に行われてきており、その課題も大人にとっての援助・被援助場面を使用したものであった。しかし、幼児が大人と同様の援助・被援助場面を「助けている」「助けられている」と捉えているかは明らかではない。従って、幼児の被援助の受け取り方を検討するうえで、大人と同様の場面を用いることは不十分である。そこで事前調査として、幼児期の子どもたちがどのような場面を「助けられている」と捉えているのかを調査する。なお、本調査では、幼児の回答のしやすさを考え、援助者を事前に「お母さん」「お父さん」「幼稚園の先生」「他の大人」「友だち」と設定し、そのエピソードを尋ねる。

さらに、被援助による不快感情に関してもその有無を確認する質問を行う。西川 (1998) で示された不快感情の要素である自尊心の脅威、衡平性の崩壊、心理的負債の 3 つについて、被援助時にそのように感じる可能性があるのかの有無を質問する。

方 法

調査児：千葉市内の私立幼稚園に通う年長児 13 名（男子 7 名、女子 6 名、平均月齢 75.46 ヶ月）

調査時期：2007 年 1 月末～2 月初旬

手 順：個別による半構造化面接を行った。

ラポール形成後、質問 1 として幼児の援助経験に関する質問（これまで人を助けたことがありますか？）を行った。「はい」と答えた場合は援助内容と相手聞き、「いいえ」と答えた場合は、「大変そうな人を助けてあげたり、お手伝いをしてあげたことはある？」と再度尋ねた。幼児が再び「いいえ」と答えた場合は「助ける」「手伝う」の意味が分かるのかを確認し、次の質問へ進んだ。

質問 2 として、幼児の被援助経験を援助者別に尋ねた。質問 1 とは異なり、被援助者の立場での経験が聞きたいことを幼児に告げたあと、「○○君（ちゃん）は、何か困ったなあと考えたときに、お母さんに助けてもらったことはある？」と尋ねた。「はい」と答えた場合は、そのエピソードと、その時の気持ちがどのようなものであったかを続けて質問した。「うれしい」などの気持ちを自分から答えた幼児に関しては「嫌な気持ちはしなかった？」と確認した。また、気持ちを答えることができない幼児に関しては、それが「いい気持ち」だったか、それとも「嫌な気持ち」だったかの確認を行った。その後、同様の質問を援助者 5 通りの場合について全て尋ねた。

最後に、質問 3 として被援助による自尊心の脅威、心理的負債、衡平関係の崩壊による「嫌な気持ち」が生じることがあるか否かを尋ねた。なお、幼児が被援助児の否定的感情を自分で想像することが難しいであろうことを考え、本調査では「私（調査者）は人に助けてもらおうと嫌な気持ちを感じてしまうことがある。」と幼児に説明し、「何かをやってもらったらその人に助けてもらわないとできな

いと思われるのが嫌だ（自尊心の脅威）と思うが、〇〇君にはそんなこと思うかな、思わないかな？」と聞いた。回答が口答では難しそうな幼児には思う（嫌そうな顔）、思わない（快・不快のどちらでもない顔）の絵カードを提示し選択してもらった。同様の質問を心理的負債（お返しをしないといけないと思うと嫌な気持ちになってしまう）、衡平性の崩壊（自分ばかりが得をしていると思うと嫌な気持ちになる）についても行い、その後お礼を言い、面接を終了した。

結果と考察

幼児 13 名のうち、自らの援助経験を語る事ができたのは 6 名であり全体の 46.2%であった。しかし、その後の質問で「助ける」「手伝う」の意味が分からないと答えた幼児はいなかった。

援助経験

幼児の援助経験のエピソードとして語られたのは 9 つであり（表 1）、その多くが大人への「お手伝い」という意味合いが強いものであった。

表1 援助経験のエピソードと、その相手

エピソード	相手
転んだときに大丈夫？と言った	(子ども・友だち)
泣いてるとき大丈夫と言ってあげた	(友だち)
雑巾をしぼってあげた	(先生)
お風呂を洗う・料理の手伝い	(お母さん)
料理の手伝い	(お父さん)
お皿や料理を運んだ	(おばあちゃん)
財布を届けてあげた	(お父さん)
お茶会のあと片付け	(先生)
遊んであげた	(妹)

被援助経験

援助者の違いによる援助経験の有無を表 2 に示す。半数以上の幼児がお母さん、先生、友だちに助けてもらったことがあると認識している一方、ほとんどの幼児が父親や、他の大人から助けてもらった経験はないと感じていた。この理由として、母親や先生が幼児が最も活発に動き回る時間をともに過ごしていることが上げられる。父親が幼児と一緒に過ごす時間は限られており、インタビュー時、「パパは忙しいから助けてもらったことはない」と発言している幼児もいた。また、「他の大人」については、被援助経験の有無を答えることができなかった幼児に対して、「近所に住んでいる人やおじいちゃんや、おばあちゃん、知らない人でもいい」と追加の教示を行った。しかし、これらの大人の概念は広く、幼児には援助を受けた状況が絞りにくかったのかもしれない。

表2 援助者別の被援助経験の有無

	お母さん	お父さん	先生	他の大人	友だち
ある	8 (61.5)	3 (23.0)	7 (53.8)	1 (7.6)	7 (53.8)
ない	5 (38.5)	10 (77.0)	6 (46.2)	12 (92.4)	6 (46.2)
計	13 (100.0)	13 (100.0)	13 (100.0)	13 (100.0)	13 (100.0)

()内は%

援助者別の被援助エピソードを表 3 に示す。母親からの援助では、自分の能力を補ってもらうための「やってもらう」「教えてもらう」ことに関する援助が多かった。父親からの援助では「怒ってもらう」という父親の権力からの援助が特徴的であった。先生からの援助では、自分が本当に困った状況におかれたときの「大丈夫？」などの声がけを援助として、「助けてもらった」と思うことが多いようであった。

表3 被援助経験の相手別エピソード

相手	エピソード
お母さん	落ちそうになったときに助けてくれた 算数の勉強を手伝ってくれた プラモデルを作るのを手伝ってもらった。
	お片づけ 自分の布団を片付けてもらった 補助なしの自転車に乗るときに押さえてくれた 折り紙を折ってもらった
	お父さん
先生	転んだときに消毒をしてくれた 転んだときに大丈夫？と言ってくれた 大丈夫？と言ってもらった。 制作がうまく折れないとき 並ぶときに呼んでくれた
他の大人	道を教えてもらった
友だち	追いかられるのを教えてくれて、大丈夫、守るよと言ってくれた。 外で遊んでもらった 転んだときに助けてくれた ゲームの進め方を教えてくれた

被援助時の気持ち

援助者別に被援助時の気持ちを、肯定的・中間的・否定的に分けたものを表 4 に示す。幼児は援助をほぼ肯定的に捉えており、うれしい、しあわせ、ありがとうという気持ちがあることが示された。本調査で何名かの幼児に見られた中間的感情とは、援助を受けても「何も感じない」「い

つもと同じ」などと答えている場合を示している。幼児にとって、援助を受けること自体があまりに日常的な出来事であるために、このような気持ちの表現が生じたと考えられる。

表4. 援助を受けたときの気持ち

	お母さん	お父さん	先生	他の大人	友だち
肯定的	7 (87.5)	1 (33.4)	6 (85.7)	1 (100.0)	6 (85.7)
中間的	1 (12.5)	2 (66.6)	1 (14.3)	0 (0.0)	1 (14.3)
否定的	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
計	8 (100.0)	3 (100.0)	7 (100.0)	1 (100.0)	7 (100.0)

()内は%

被援助による否定的感情の有無の確認

被援助により、否定的感情が生じることがあるかを尋ねた結果、自尊心の脅威、心理的負債、衡平関係の崩壊の全てにおいて、約70%の幼児が感じることはないと答えた(表5)。このことから、幼児が援助を受けることに否定的な感情が生じることも少なく、そのため援助を受けることにためらいがない様子が伺えた。

表5. 被援助による否定的感情

	自尊心の脅威	心理的負債	衡平関係の崩壊
思う	4 (30.8)	4 (30.8)	3 (23.1)
思わない	9 (69.2)	9 (69.2)	10 (76.9)
計	13 (100.0)	13 (100.0)	13 (100.0)

()内は%

しかし、質問3で提示した全ての否定感情の要素(自尊心の脅威、心理的負債、衡平関係の崩壊)について全てを「思う」と答えた幼児もいれば、どれかひとつを「思う」と答えた幼児もあり、どの否定感情の要素から生じるのかを明らかにするには至らなかった。

今後の課題と方向

本調査は事前調査であり、幼児がどのような場面を「助けている」「助けられている」と感じているのか、さらには彼らが、その被援助を否定的に受け取ることがないことを示した。しかし、調査者に否定的感情が生じることを示し、その上で幼児にもそのようなことを感じるときがあるか否かを尋ねた質問3では、約3分の1の幼児がそのように否定的感情を感じるものが「ある」と答えており、質問2で否定的な感情はないと全ての幼児が答えたこととの矛盾が見られた。この理由として以下の2点が考えられる。第1に、質問2ではほぼ全ての幼児が、被援助によって肯定的感情のみを抱くと

回答している。被援助時の「うれしい」という肯定的な感情と比較すると、否定的な感情はあまりにも小さなものであったために、幼児がそれを気に留めるのは難しかったかもしれない。しかし、質問 3 では被援助による否定的な感情のみを取り出し、その有無についての質問を行っている。このとき否定的な感情だけを単一に取り上げたことで、その存在が幼児の中で際立ち明確に感じられたために、質問 3 では否定的な感情を抱くことが「ある」と答えた幼児が増えた可能性もある。第 2 に、質問 3 では大人である調査者が、「嫌だと感じることもある」と明言してしまったことも矛盾が生じた大きな原因であろう。幼児は、大人である調査者がそう感じるのであればそれが正解なのであると考えたことから、自分の経験ではなく正解を答えようと考え、否定的な感情を抱くことがあると回答してしまったということも考えられる。この点に関しては、質問の提示方法を変更することで解消できるかもしれない。このように、事前調査ではいくつか改善が必要となる点が上げられた。

今後は、事前調査の結果と反省を踏まえ、質問方法を見直し、よりはっきりした幼児の被援助時の否定的感情の有無を含む特徴をつかんでいくことにする（第 1 調査）。

Cooke(1992, 1997)は、児童期初期の子どもたちが、児童期後期の子どもと同様の心理的負債による不快感情を抱くことを明らかにしている。そのため、幼児期から児童期までには心理的負債の感じ方に何らかの発達が見られるはずである。そのため第 2 調査では、被援助による不快感情の中でも特に心理的負債による不快感情に焦点をあて、子どもがどのような援助場面で心理的負債をより強く抱くのかを明らかにする（例えば、大人に助けられたときと、友人に助けられたときなど）。さらに、どのような子どもがより強く心理的負債を感じるのかを明らかにすることで、なぜ人が被援助に心理的負債を感じるようになるのかを明らかにしていく。

引用文献

- Cooke,P.A.D.(1992).Children's understanding of indebtedness as a feature of reciprocal help exchange between peers. *Developmental Psychology*,28 ,948-954.
- Cooke,P.A.D.(1997). Children's perceptions of indebtedness : The help-seekers perspective. *International Journal of Behavioral Development*, 20,699-713.
- Greenberg, M. S. (1980). A theory of indebtedness. In K. Gergen,M. S. Greenberg, & R.H.Willis(Eds.)*Social exchange: Advances in theory and research*(pp.2-26).New York:Plenum Press.
- Gouldner,A.W.(1960). The norm of reciprocity: A preliminary statement. *American Sociological Review*,25 161-178
- 西川正之(1998).「援助研究の広がり」 松井豊・浦光博編『人を助ける心の科学』 誠信書房, 116-148.
- 泉井みずき (2006). 被援助に対する心理的負債感とその規定要因の発達の变化 千葉大学教育学研究科修士論文.